

play here outline 2024

はじめに

公園は「みんな」のためのものです。でも、その「みんな」という枠組みに入ることに困難さを帯びている方々があります。例えば、車椅子を利用していたり、対人コミュニケーションに困難さを覚える子どもたちであり、その保護者の方々です。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」は、それらの課題に関する実態を把握し、問題の所在を見極め、当事者の方々・市民・関係団体等との協同により、それらの解決を目指すものです。ひいては、その活動を通して、小金井市における共生社会の実現に寄与することをも目的としています。

令和7年度の実際的な整備のキックオフを想定し、令和6年度までにそのための「判断材料」「判断指針」「仮説」を整理し、さらにはそれらの進捗を含めた情報をできるだけ広く公開していくことにより、豊かな検討と実践の基礎づくりを進めていきます。

大切にすべき考え方（案）

・ハード整備偏重を避けたい

遊び場等の整備において、ハード整備偏重は避けるべきです。ハードとソフト、そして持続的な運用体制が健やかに統合される状態を目指します。

・ソフト運用を踏まえた持続可能な体制構築を前提としたい

市内の公園では、市民によるマルシェイベントや移動販売等の利活用が促進されつつあり、公園におけるボランティア制度や指定管理者制度の面的な導入も始まっています。またそれらにおいて、小金井市の特色の一つでもある農業従事者の方々との連携も進められています。そのような市内の公園におけるソフト面での運用や運営主体との連携も視野に入れることが望ましいと考えます。

・心のバリアフリーに配慮した普及啓発に留意したい

「障がいの社会モデル」といった考え方を踏まえ、豊かに育まれるべきものは、私たちのリテラシーやマインドセットであると考えます。ハードやソフトのみならず、そのような普及啓発活動にも注力すべきと考えます。

・地域の気運や住民の主体的な関わりを醸成したい

当事者の方々・市民・関係団体等との協同を基礎とし、また子どもたちとの対話の機会を大切にしていきます。

- ・中長期的な目線で解決したい

小金井市が管理する公園の数は200を超えます。インクルーシブ遊具の導入といったハード整備の面から見ると、そちら全ての公園に対して一律的な整備を行うことは現実的ではありません。とはいえ、老朽化した遊具やトイレ等の再整備の際に、インクルーシブデザインの観点で配慮されたものに置き換えるといった検討は積極的にしていくべきと考えます。

具体的なフィールド（案）

これまでの当事者や地域の方々との協議及び令和5年度の調査業務等を踏まえて、以下の3つの公園が令和7年度の整備における具体的なフィールドとして想定されています。これらの公園をテストケースとしつつも、小金井公園や野川公園といった市内の大規模公園等との連携を進め、市内における面的な施策についても検討を進めていきます。

- ・三楽公園

老朽化した遊具（ブランコ）のインクルーシブ遊具としてのリプレイスや菜園の新設を検討

- ・栗山公園

インクルーシブ遊具の新設を検討

- ・梶野公園

花壇のリニューアル整備を検討

（その際に、子どもたちの居場所づくりに寄与する施策を検討）

令和6年度中にユニバーサルベッドを新設

令和6年度の具体的な施策

1.調査広報

より良い実践には、より良い判断が必要となります。そして、そのためには、より良い判断材料と判断指針が欠かせません。令和5年度の調査業務を継続発展させ、それらの情報を整理し広く公開できる状況をつくります。

1-1.関係者ヒアリング調査

子どもたち、保護者の方々や公園の運営に携わるの方々等、ステークホルダーへのヒアリング（定性調査）を行い、数字には還元できないエピソードを大切にしていきます。同時に、アンケート調査（定量調査）も行うことで、数値的な論拠も整理していきます。

1-2.公園の実態把握調査

市内の公園の利用動向、遊具やトイレ等を含む基礎インフラの老朽化状況、ユニバーサルデザインの対応状況等及び公園運営体制の実態を把握し整理します。

1-3.学術調査

遊び場等の整備に向けて議題化すべき論点や最新研究の動向や、また、いわゆる「心のバリアフリー」に向けて把握し、心掛ける必要があることなど、市内の実践者や専門家等にヒアリングをし、地域で大切にすべき知見として整理します。

2.仮説検証

これまでの活動によって検討された仮説を前述の調査業務を通して磨きつつ、小規模かつテンポラリーに実践できるものは、イベントやワークショップといったスタイルも含めて検証を重ねていきます。

2-1.基礎インフラの改修

公園のトイレにおけるユニバーサルベッドの整備など、早期及び安価に導入できるものは取り入れて、利用者の方々の反応を伺い、今後の施策に反映していきます。

2-2.ワークショップ型のテスト整備の実施

例えば、ユニバーサルデザインに配慮された遊具の試験的な導入とともに、必要な心構え等を共有した大人をスタッフとして配置し、当事者の子どもたちを含む関係者を招待するワークショップイベントを複数回開催します（その際には調査成果を、その進捗を含めて活用していきます）。目指すべき未来を後回しにせずに、状況として立ち上がらせます。リアルイベントを通して、より多くの子どもたちの声に耳を傾け仮説を検証しつつ、市内での周知浸透を図ります。また、それらの準備プロセスそのものも、地域関係者間の会話機会と位置付けて設計してきます。

2-3.令和7年度以降の計画策定

一連の活動を踏まえて、令和7年度の整備事業計画や今後の小金井市における遊び場等整備事業のためのガイドラインを立案します。

3.普及啓発

プロジェクトの理解訴求を図るために、そのプロセスを含めた情報発信を行います。

3-1.情報発信ツールの作成と運用

- ・チラシ：広い認知訴求
- ・冊子：深い認知訴求（調査成果の反映）
- ・Instagram：動的な情報発信
- ・Web：冊子等のコンテンツの受け皿

3-2.成果報告会の実施

一連の活動の成果を取りまとめて、成果報告会を開催します。そこで、令和7年度以降の展望を共有していくことで、市内での機運醸成を図ります。